

図書館だより

北海道大学附属図書館報 第29巻3号(通巻183号) 2007.10.10

vol.29

NO. 3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

神原勝

2 学生時代に出会った本

大濱徹也

3 人間が人間であるために —『スモール イズ ビューティフル』が問いかけていること—

増地あゆみ

4 旅と読書

原井憲二

5 芸術のヒント —本と私—

6 図書&視聴覚資料 貸出ランキング

栗林広明

8 思い出すこと

編集後記

本

学生時代に 出会った

文＝神原 勝

(かんばら まさる／法学部教授)

でいた。それまで見聞した故郷の村の政治を重ね合わせると一々納得できた。その政治とは民主主義には程遠い政治である。ところが上の2つの文献は、ボスが支配する地域政治は大都會でも同じだから、地域に民主主義を確立して自治体を改革することは日本の政治の焦眉の課題だと提起している。

目からうろこが落ちた。以来地方自治に強く関心を持ち続けた。2冊の文献が提起した問題は瞬く間に現実の姿となった。経済成長を支える工業化が急激に進展して、人口が農村から都市へ大量に移動した。けれども都市的生活様式を支える諸条件の整備が追いつけず劣悪であったから、生活のあらゆる側面で市民運動が発生した。従来の労働組合などによる組織型・動員型の運動とは異なる、個人型・自主型・参加型の市民運動の登場である。

その市民運動のまなざしは身近な自治体に向けられた。自治体は市民運動の直撃を受けて市民の政府としての目覚めを余儀なくされた。それを象徴する事件が1963年の統一自治体選挙である。この選挙では、市民運動を含む無党派層の反乱が起こって、革新市長が大量に当選して、自治体改革に大きな弾みをつけた。環境・福祉などの政策面、参加・公開などの制度面で、次々に先駆自治体が現れて自治体の力量を引き上げていったのである。

これらはすべて在学中のことで、私はいささか興奮気味に学生時代を過ごした。先生と2冊の文献に出会わなければ、このような地域社会の歴史的な変動や自治体改革の息吹と自覚的に向き合うことはできなかったし、地方自治の研究者の道を歩むこともなかったと思う。大学を卒業してから7回引越越し、そのつど本や資料の処分を余儀なくされてきたが、学生時代の文献や資料は、いままもって完全に処分の難を免れている。そのなかで2冊の文献は、40年の歳月を経てとくに破損が著しい。それでも私の宝であり続けている。

私の専攻は「自治体学」である。政府としての自治体の自立と自律とか市民自治の成熟を主要な研究テーマとしている。演習などで学生から「先生はいつから、なぜ地方自治に関心を持つようになったのか」と問われることがある。確かな将来予測などは困難な昨今である。質問する学生には、ある事柄に拘泥して生きている人間の、こだわりの原風景とか経験を収集して、何か役に立つことを探り当てたい、という欲求があるらしい。

幾度か職を転じ、プラグマチックに流れ、試行錯誤を続けた自分史を振り返れば、とても学生の質問には明快な回答はできないが、2冊の文献との出会いから大きな影響を受けたことだけは間違いない。大学1年であった1961年のこと、所属していた「政治学会」というサークルのチューターの先生から、東京の西武池袋線の電車の中で単行本と月刊誌を手渡され、これを読んでみてはどうかと勧められたのである。

それは1960年に発行された『大都市における地域政治の構造』という調査報告書と『思想』の1961年5月号である。振り返ればこの2冊は、戦後の社会科学と現実政治の両面から等閑に付されていた「地方自治」を、あらためて理論的・実践的に再構築しようと試みた最初の文献であった。「地域民主主義」と「自治体改革」をキーワードとし、地方自治は国民が政治参加の精神と自治能力を日常的に蓄積する大きな役割を持つと書いてあった。

私は高校のころから杉浦明平の著作が好きで、ボス支配の地域政治を赤裸々に描いた『台風十三号始末記』などのドキュメンタリーを面白く読ん

人間が人間であるために

—『スモール イズ ビューティフル』が問いかけていること—

文＝大濱徹也（おおはま てつや／人文学部教授）

現代人は、自分を自然の一部と見なさず、自然を支配、征服する使命を帯びた存在だと思っています。人間は、科学・技術の進歩を戦力に、自然の富ともいうべき化石燃料たる石炭、石油、天然ガス等を奪いつくすことで、便利で快適な「文明生活」なるものを謳歌し続けられるという幻想をいだいて生きてきました。しかし現在、世界的規模で起こっている自然災害は、まさに収奪され続けてきた自然の復讐であり、人間の営みを支えてきた幻想が根底から崩壊していることを何よりも雄弁に物語っているものにほかなりません。しかし「文明」を宗とする近代化の論理は、自然と人間の関係をめぐる物語を、無知蒙昧の産物となし、自然の呻きに耳を傾けることを拒否し続けているようです。

こうした人間の幻想を支えたのは、物質至上主義の経済発展論を説き、科学技術の進歩によせる楽天的とも言うべき信仰でした。この信仰は、大きいことは良いことだとなす巨大技術へのゆるぎない信仰を教義となし、効率という尺度で人間の営みを測り、合理化の名の下に人間の暮らしから無駄を切り捨てることを説いてやみません。ここには、economicsを翻訳するにあたり、財を管理運用し利益のみを是とする「理財学」ではなく、世を治め民をすくうことを旨とした「経世済民」の学であるべきとの思いで経済学とした哲学が忘却されています。現在まさに問い質さねばならないのは、この経済学の命名にこめられた思いを原点に、人間が人間として生きうる営みを支える人間の学の構築に思いいたすことではないでしょうか。

そのような学の構築をめざした一人が「人間中心の経済学」を提示したE.F.シューマツハーです。その著『スモール イズ ビューティフル』（講談社学術文庫 1986年）は、「経済学は自立した学問ではない」となし、「経済学の目的と目

標は人間の研究から導き出されなければならないし、その方法論の主要部分は自然の研究から導き出すべきだ」と説きます。その主張は、「人間というものは、理解の集団の中でこそ人間でありうる」という場から、現代社会の病巣を解析し、打開への方途、人間が人間として生きれる社会をめざすための方策の提言です。

その提言は、「地域主義」「開発」「地方分権」「中間技術」等々に説き及んでいます。現代の闇を切り裂くものです。ちなみに彼が説く中間技術とは、「本質的に暴力的で、生態系を破壊し、再生不能資源を浪費し、人間性を蝕む」大量生産の技術ではなく、「現代の知識、経験の最良のものを活用し、エコロジーの法則にそむかず、希少な資源を乱費せず、人間を機械に奉仕させるのではなく、人間に役立つように作られている」大衆による生産の技術への期待です。それは、巨大技術と比べ、はるかに素朴で安く、制約の少ない性格をもっており、「自立の技術」「民主的技術」「民衆の技術」とも言うべきものと位置づけられています。そこには人間の営みを如何にしたら豊かになしうるかとの強き思いが託されています。その論調をつらぬくのは、「小さきもの」「小さな世界」にこだわる目であり、人間が自然のなかで、自然と協調していか生きるかという問いかけです。シューマツハーが問いかけている言葉には、「理想からいえば、『地区』には内的なまとまりと郷土意識があり、その中心として、少なくとも一つの町があることが望ましい。『経済の構造』が必要のように、『文化の構造』も必要である」をはじめ、「大きなものは良いことだ」と言わんばかりの当世流行の言説への根源的批判があります。町村合併をはじめとする経済至上主義の「改革論」によって奪われた人間の営みを問い質すためにも、シューマツハーの言葉に耳を傾けてみませんか。

旅と読書

文=増地 あゆみ

(ますち あゆみ/経営学部准教授)

旅と読書。多くの人にとって、この2つはとてもしずかな時間の過ごし方だと思います。どちらもそれ相応の時間を必要とするからです。最近、旅と読書を併せることで、限られた時間をできるだけ有意義に過ごすようにしています。ありきたりですが、読書は旅をより豊かにしてくれます。行き先が決まれば、その街や国にまつわる本を探し、出発前に目を通して知識を得ておくと、現地目にする景色や建物、人々の様子を深く観察する眼を持つことができます。また逆に、旅と併せることで読書の方も数倍楽しくなります。名所と呼ばれる土地や建築物には歴史があります。その歴史に触れた小説やエッセイを通して、歴史上の重要な出来事やエピソードを具体的に知ることができますが、読みながら現地のガイドブックや地図を開き、舞台となった土地や建築物などを確認すると、より鮮明なイメージを描きながら読み進むことができます。旅が一層待ち遠しくなります。そして旅から戻った後、再び本を開き、実際に自分の足で歩いてきた土地や、実際に目にした景色や建物にどのような謂われがあったかを再確認し、改めて感慨にふけります。

この夏のイスタンブールへの旅では、これらの作業を今までになく楽しみました。まず出発前に読んだのは、『コンスタンティノープルの陥落』（塩野七生）です。イスタンブールはその昔コンスタンティノープルと呼ばれ、約1000年の間ビザンチン帝国の首都として、その後はオスマントルコ帝国の首都として栄えた街です。この小説には、1453年にビザンチン帝国がマホメッド2世率いるオスマントルコによって滅ぼされるまでの数ヶ月間の攻防が事細かに描かれ、攻防に関わった多くの人物、その舞台となった様々な建築物が登場します。ビザンチン帝国攻略の足がかりとして、マホメッド2世がわずか4ヶ月で造らせたというメルメ・ヒサーリ（要塞）、攻撃を受けたコンスタンテ

イノープルのギリシャ人たちが神に祈った聖ソフィア大聖堂、海戦の場となったボスフォラス海峡とコンスタンティノープルの街を一望できるガラタ塔、勝利したマホメッド2世が建てたトプカプ宮殿、これらは現在も観光名所として多くの観光客で賑わっています。小説で読んだエピソードを思い出しながらの観光は、短い時間でしたが充実したものとなりました。

もう一冊、飛行機の中で読んだのが、『イスタンブールを愛した人々：エピソードで綴る激動のトルコ』（松谷浩尚）です。これはトルコの日本大使館・総領事館に長く勤務された外務省の方の著書で、オスマン帝国が崩壊してトルコ共和国が誕生するまでの約1世紀にわたる時期に、トルコと関わりを持った12人の物語が綴られています。この本では意外な人物がトルコに関わっていたことを知りました。クリミア戦争で負傷した兵士を看護したナイチンゲールの活動の場は、イスタンブールのアジア側に現存するセリミエ兵舎だったそうです。またトロッキがロシアを追われ、亡命した先もイスタンブールでした。日本人も数名登場します。その一人の山田寅次郎は、明治時代にトルコへ渡った後、延べ約20年も住み、新生トルコの父として今でも国民的英雄であるケマル・アタチュルクの士官時代に日本語を教えたこともあるそうです。後に日本で首相となった芦田均は戦前、臨時大使としてトルコに滞在し、このとき大使館としてイスタンブールに購入した建物が現在の総領事館となっています。残念ながら時間が足りず、こちらの本に登場する名所はほとんど見学できませんでしたが、またいつか機会があれば訪ねてみたいと思っています。今は、この2冊を読み返しながら、ヨーロツパを思わせる古い街並みに数多くのモスク（イスラム教の寺院）がそびえ立つイスタンブールの不思議な光景を思い出しています。

芸術のヒント

—本と私—

文=原井憲二 (はらい けんじ/工学部准教授)

幼少時代、本が嫌いで図書館という場所に通った記憶が殆どありません。嫌いになった理由は小学校での音読の時間なのですが、洒落にならないくらい下手でいつも恥ずかしい思いばかりしていたことがトラウマとなり、気が付けば反射的に本自体を敬遠するようになっていました。そんなトラウマがいつの日か私の本に対する劣等コンプレックスとなったのは想像するに容易いことです。そんな子供でしたから、図書館との縁なくなるはずです。体質的に受け付けられない本や図書館でしたが、なぜかそんな気持ちとは裏腹に極度の興味、憧れがあったのは事実です。コンプレックスを抱いていたからこそ特に惹かれたのですが、初めて付き合った女性は暇さえあれば図書館に入り浸り、読む本がなくなるほどの私とは対極的な大の本好きな娘でした。

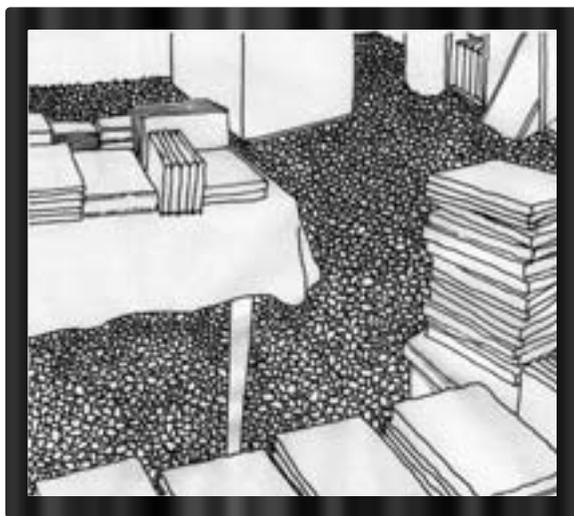
2000年に私がフランスで発表した「金の絨毯—著者達に捧ぐ—」という作品も、そんな幼少期のコンプレックスをヒントに制作したモノです。24時間耐久レースで知られる

ルマンにあるPlurielleという書店で行った展覧会の作品です。内容は通常のお店の状態に、ただ床に黄色く塗られた小石を敷き詰めるというものでした。当初の予定では、私の通っていたエコール・デ・ボザールの図書館に敷き詰めるはずでしたが、構造上の問題から床が小石の重さに耐えられないという理由で急遽、Plurielle書店に変更となったのです。体感型の美術作品を文章で説明することほど面白くないモノはありませんが、黙って本の並び（羅列）を想像してみてください。

規則正しく並べられているつもりでも、それはお客が手にし易い並びで配置されているため、内容の整頓であっても見た目の整頓ではありません。それ

らを近くで見れば見るほどその並びが気になる方もいらっしやるのではないのでしょうか。おまけに本の内容（性格）に伴って高さ、幅、奥行、色、質などデザインが様々ですから、もしそれらを離れて見たなら、まるで積み木やタイルをモザイク風にした、お洒落なインテリアのように感じられるかもしれません。本は読んで楽しむモノですが、見方を変えれば様々な個性があり顔があり、本来、控え目でありながら華やかで夢や創造を与えてくれるモノです。開けば臭いも感じるし……。著者が意識しているかは分かりませんが、物語と同時にページを一枚一枚指

で捲る仕草は、恰も体感型美術作品を鑑賞しているかのように見て取れます。作品のタイトル通り金（黄色）の絨毯を敷くことによって、著者や本に対し敬意を表しているのですが、私の一番の狙いは黄色い小石を床一面に敷き日常の風景を変えることにより、平穩無事な生活から感じ取り辛くなった感性や感覚を促すことです。灯台もと暗しのように…。



今日のように便利さ都合良さを追求するあまり、インターネットでどんな情報も簡単に手に入る世の中になったが故に、失ったものは大きいはずですが。図書の世界でもそんな社会に伴い、本もデジタル化されネット上で手軽に扱えますし、図書館もコンピュータ管理され使い勝手のいい環境になってきています。それがいいにしろ悪いにしろ、もう一度私たちは「本」とは何かを考え直す必要があるのではないのでしょうか。「本を踏んだり、跨いだりしてはいけない」と、誰もが当たり前感じていたあの頃の方が、学ぶことが多かったように感じるのは私だけでしょうか。本にコンプレックスを抱いていたそんな私が言うのも可笑しい話ですが。

図書&視聴覚資料

貸出ランキング

今年も出ました！ 貸出のランキングです。2007年4月1日～2007年9月30日の期間の貸出回数を基に集計をしました。授業に役立つ図書や、見逃せないあの視聴覚資料もありますよ！ 読んで見て損は無い、注目のランキングです！

本の貸出

ランキング 2007 1～10位 ※文字情報：上から 書名、出版社、著者、請求記号、所蔵ID

1位

貸出回数 28回



自治体学の二十年・自治体学会設立の経緯
公人の友社
森啓著
318/MOR
0608831 他6冊

2位

貸出回数 24回



地域経済学
有斐閣
宮本憲一、横田茂、
中村剛治郎編
332.9/C43
0033233 他7冊

3位

貸出回数 21回



ハリー・ポッターと謎のプリンス 上
静山社
J. K.ローリング作；松岡佑子訳
933/ROW/上
0546396 他3冊

3位

貸出回数 21回



図書館戦争
メディアワークス
有川浩著；徒花スクモイラスト
913.6/ARI
0552679 他1冊

5位

貸出回数 19回



名もなき毒
幻冬舎
宮部みゆき著
913.6/MIY
0551536 他1冊

5位

貸出回数 19回



ヨウイ
講談社
佐藤多佳子著
913.6/SAT/2
0552175 他1冊

5位

貸出回数 19回



図書館内乱
メディアワークス
有川浩著；徒花スクモイラスト
913.6/ARI
0552948 他1冊

5位

貸出回数 19回



使命と魂のリミット
新潮社
東野圭吾著
913.6/HIG
0554541 他2冊

9位

貸出回数 18回



債権総論・担保物権第3版
東京大学出版会
内田貴著
324/UCH/3
0542428 他4冊

10位

貸出回数 17回



構造力学 下
森北出版
崎元達郎著
501.34/SAK
0492524 他10冊

10位

同着

貸出回数 17回

総則・物権総論第3版
東京大学出版会
内田貴著
324/UCH/1
0542739 他2冊

陰日向に咲く
幻冬舎
劇団ひとり著
913.6/GEK
0545567 他1冊

イチニツイテ
講談社
佐藤多佳子著
913.6/SAT/1
0552174 他1冊

ドン
講談社
佐藤多佳子著
913.6/SAT/3
0552176 他1冊

本の貸出 ランキング 2007 15~25位

順位	タイトル	出版社名	編著者名	請求記号	所蔵ID	貸出回数
15位	政党の凋落、総力戦体制	東京大学出版会	升味準之輔著	312.1/Ma68/3	0001234 他3冊	16
	ハリリー・ポッターと謎のプリンス 下	静山社	J. K.ローリング作;松岡佑子訳	933/ROW/下	0546397 他3冊	
	銃とチョコレート	講談社	乙一著	913.6/OTS	0551502 他2冊	
	刑法総論講義 第4版	東京大学出版会	前田雅英著	326.1/MAE	0557633 他2冊	
	夜は短し歩けよ乙女	角川書店	森見登美彦著	913.6/MOR	0555407 他1冊	
20位	3時間でわかるミクロ経済学入門	早稲田経営出版	早稲田公務員セミナー編著	331/WAS	0260145 他3冊	15
	3時間でわかるマクロ経済学入門	早稲田経営出版	早稲田公務員セミナー編著	331/WAS	0260146 他3冊	
	刑事訴訟法 最新第2版	早稲田経営出版	新保義隆、早稲田司法試験セミナー編著	327.079/SHI/12	0384664 他2冊	
	反自殺クラブ	文藝春秋	石田衣良著	913.6/ISH/5	0536244 他1冊	
	日本人らしさの構造:言語文化論講義	大修館書店	芳賀綾著	810.1/HAG	0596400 他2冊	
25位	日本政治史:明治・大正・戦前昭和 改訂版	放送大学教育振興会	坂野潤治著	312.1/B19	0004063 他1冊	14
	地域開発政策と持続的発展:20世紀型地域開発からの転換を求めて	日本経済評論社	小田清著	601/KOD	0095337 他8冊	
	自由民主党年報	自由民主党	自由民主党編集	315.1/J55	0294503	
	内閣の創設から政党内閣の崩壊まで	新評論	小山博也[ほか]著;白鳥令編	317.2/Sh86/1	0297694 他1冊	
	道路橋示方書・同解説[2002年]改訂版	丸善(発売)	日本道路協会編	515/DOR	0387230 他6冊	
	ハリリー・ポッターと不死鳥の騎士団 上	静山社	J. K.ローリング作;松岡佑子訳	933/ROW/上	0530140 他5冊	
	東京DOLL	講談社	石田衣良著	913.6/ISH	0540943 他1冊	
	刑法各論 第3版	弘文堂	西田典之著	326.2/NIS	0544242 他1冊	
	地域経済発展と労働市場:転換期の地域と北海道	日本経済評論社	奥田仁著	332.11/OKU	0266177 他6冊	
	灰色のピーターパン	文藝春秋	石田衣良著	913.6/ISH/6	0551503 他1冊	
	美丘	角川書店	石田衣良著	913.6/ISH	0552173 他1冊	
	宮部みゆき(はじめての文学)	文芸春秋	宮部みゆき著	913.6/HAJ/[5]	0557009 他1冊	
憲法 第4版/高橋和之補訂	岩波書店	芦部信喜著	323.14/ASH	0557127 他3冊		
実務解説独禁法Q&A	青林書院	伊従寛、矢部丈太郎編	335.57/JIT	0608615		

AV資料貸出 ランキング 2007 1~29位

1位 貸出回数 91回

パイレーツ・オブ・カリビアン:デッドマンズ・チェスト 2-Disc スペシャル・エディション



1位 貸出回数 91回

タイヨウのうた



3位 貸出回数 71回

嫌われ松子の一生: memories of Matsuko



順位	タイトル	貸出回数
4位	M:::III 2-disc collector's edition	69
5位	ダ・ヴィンチ・コード テラックス・コレクターズ・エディション	64
6位	パイレーツ・オブ・カリビアン:呪われた海賊たち コレクターズ・エディション	59
7位	Goal!/イングランド・プレミアリーグの誓い standard edition	53
8位	マイアミ・バイス	47
9位	花田先生の経済学シリーズ:入門基礎編1- I The有頂天ホテル スペシャル・エディション	40
11位	ライオンと魔女 スペシャル・2-Disc コレクターズエディション トランスポーター2	39
13位	間宮兄弟	38
14位	プレイブストーリー 2-disc edition	36
15位	ハリリー・ポッターと炎のゴブレット 2-disc edition	35
16位	S. W. A. T.コレクターズ・エディション	34
17位	X-ファイルセカンド・シーズン	26
18位	花田先生の経済学シリーズ:入門基礎編1- II X-ファイルファースト・シーズン	25
19位	40歳の童貞男 無修正完全版 かもめ食堂	24
22位	花田先生の経済学シリーズ:入門基礎編2- I メゾン・ド・ヒミコ Star Wars; Episode 3/Revenge of the Sith	22
25位	バトル・ロワイアル	19
26位	羊たちの沈黙 コーチ・カーター フライトプラン	18
29位	キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン=Catch me if you can 2 disc special edition 花田先生の経済学シリーズ:入門基礎編2- II	17

思い出すこと

栗林広明

（くろばやしひろあき）／経済学部准教授

大学生時代に私が影響を受けた二人の人物について思い出を書きたいと思う。世の中に向き合ったり、自身のことを考えたりするとき、我々は何らかのよりどころを必要とする。私にとってそれは渡辺一夫と高橋和巳であった。

渡辺一夫には遠回りをしてたどり着いた。大学に入ったばかりの頃は、近所の個人書店で文庫の立ち読みをして、時々大江健三郎などを買っていた。大江の本はまずタイトルが魅力的だったが、ただし読んでみると中身は難しかった（『個人的な体験』、『セヴンティーン』などが記憶に残っている）。もう少し直接的で分かりやすいものを探していたとき、小説ではないが加藤周一の『羊の歌』を知った。これは自伝だが、文楽やオペラについて書いている箇所には自分はそういうものを見たことないなあと思いながらも、バランスの取れた思考に触れることができた。ところでその本の中に「渡辺一夫」という名前が印象的な仕方が出てくる。そのときは東大のフランス文学者ということぐらいしか分からなかったのだが、その後偶然に大学生協の書店で渡辺の本（『ヒューマンイズム考』、『寛容について』）を見つけ、ああ、あの渡辺一夫の書いたものが読めるのだと思ったことを覚えている。さらに、前後して、同じ書店で大江が渡辺の著作について講演したものを書き起こした本（『日本現代のユマニスト 渡辺一夫を読む』）を見つけた。そして大江が渡辺の弟子であり、渡辺のことを慕っていたことを知った。さまざまに関心がそこで一つにまとまって、渡辺の著作を読むようになっていった。彼がヨーロッパにおける過酷な宗教戦争とその克服について、あるいは日本が行ったこのあいだの戦争とその後の日本の歩みについて考察したものを読み、当時の自分なりに吸収しようとした。

一つ反省を述べると、彼の代表的な業績である、ラプレー『ガルガンチュワとパンタグリユエル物語』の翻訳はまだ読んでいない。復刊された

とき早速買ったのだが、その分量に萎縮してまだ手をつけていない。

高橋和巳は、その名前だけは高三のとき聞いたラジオドラマの原作の著者として知っていた。しかしそのときは「巨人」のピッチャーと同じ名前だというようなことぐらいしか考えていなかった。ただしドラマの主人公が変わった、独特の思考が心に残った。やがて大学に入り、友人から『人間にとって』、『わが解体』という文庫の存在を知らされ、その高橋和巳があのかのときの「タカハシ カズミ」であることを知った。これは今読むととってもしんどい気持ちになる本であるが、高橋の、いろいろなことをごまかすことのない、ひたむきな思考の姿勢に当時の私は惹かれたのだと思う。程なく彼の小説も読むようになった。今主に記憶に残っているのはこちらの小説家としての高橋和巳である。『憂鬱なる党派』、『我が心は石にあらず』などの単行本を古本屋で見つけては、高橋の小説だということだけで購入した。またもう大学院生になっていたかもしれないが、古本屋で高橋和巳作品集を見つけて、うれしくなり、思い切って買った（この作品集については以前もう転出された中国文学の先生が書かれていた。興味深かった）。その作品集で彼の『邪宗門』を読んだ。

再び一つ反省。上記のラジオドラマの原作は『悲の器』である。この代表作はまだ読んでいない。必ず読もうと思っている。

渡辺は1975年に亡くなり、高橋は1971年に天逝した人である。その後世界には新たな、さまざまな変化が生じ、無論彼らだけをよりどころに物事を考えていくことはできなくなったと思う。しかしそれでもこの二人の残した思考には変わらない価値があると信じている。



編集後記

みなさんこんにちは、ビッグフットです。めっきり寒くなり、秋を飛び越え冬の気配がする今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。紅葉ははじまり、美味しそうな食べ物もいっぱいなのに、最近はどこにも行かず家にこもってる日々が続いたせいで、お出かけ欲求が爆発寸前です。そんな僕の前に現れた1冊の本。完全に僕を誘惑しています。こんなキレイな夜景を見られたら心いっぱいお腹も満腹！……となるかは別として、うっとり見入ってしまうこの「丸田あつし」さんの本、独り占めです！！フッフ、気になります？ 図書館にも所蔵していますので、興味のある方は、ぜひ探してみてください！

……お腹の方は、連日のように甘いものが続いたので控えめにしよっと……

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第29巻3号 (通巻183号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード